

意志の強さ

宮城県仙台市立仙台青陵中等教育学校

三年 星 野 煌 明

「パンッ。」相手の強烈なショット。私にとつての初試合は、あっという間に終わってしまった。

私は、バドミントン部に所属している。幼い頃から家族や友達とバドミントンをしていて、休日は夜遅くまで没頭するほどバドミントンが好きだった。本格的に習ったことはなかったが、バドミントンに対する情熱は人一倍強いと、迷わず入部を決めた。だが、入部してみると、筋トレ、素振り、フットワーク、毎日その繰り返し。羽を打つ練習ばかりを行うと思っていた私にとつて、このような地道な練習はつまらなく、だんだんと練習を面倒だと感じるようになった。

それから数カ月後の中総体で、私たち一年生は、出場する先輩たちの応援をした。「ファイター!」「一本!」観客席から響く熱い声援。私も、見様見真似で先輩たちに届くように声を張り上げて応援した。一球一球に集中して、接戦でも粘り強く戦い抜くプレースタイル。先輩たちの戦う姿は、かっこ良かった。見事団体戦で男子は優勝した。その喜び以上に先輩たちの輝いている姿をうらやましく思った。それから私は、少しでも先輩たちに追いつこうと真面目に練習に取り組みむようになった。

そして、二年生になり、顧問の先生に「星野も大会に出てみないか。」と言われた。一人の選手として認められたことが、何より嬉しかったが、それもつかの間。初めは優越感に浸っていたものの、選手としての実践的な練習をするたびに、先輩との技術の差が身にしみて分かり、不安な気持ちがかんどん増していった。

迎えた大会当日、会場は応援の声や羽を打ち合う音で熱を帯びていた。試合番号が次々にコールされ、自分の試合が近づいてくる。全身に緊張が走り、心臓の鼓動は高まるばかりだ。気持ちの整理ができていないまま、私はコートに入った。いよいよ、自分の試合が始まった。いつも握っているラケットが重い。足が思うように動かない。家族や仲間の応援する声が聞こえるが、それさえもプレッシャーに感じた。すぐに点差をつけられ、気づいたときには負けていた。

結果は、一回戦敗退。そのときは、負けた実感が湧かなかったが、目標としていた先輩たちが閉会式で表彰されているところを見て、じわじわと悔しさが滲み出てきた。たくさんの方がなぐさめたり励ましたりしてくれたが、惨めな自分の心の中を見透かされているようで、苦痛だった。弱い自分が、たまたま嫌だった。

深夜になってもなかなか眠れず、布団にもぐり込んで大会のことをずっと考えていた。なぜ負けたのだろう。確かに相手は強かったが、練習次第ではもっと良い勝負ができたかもしれない。「こうしとけば良かった。」そんな後悔が、次から次へと溢れ出てくる。でも、いろんなことに思いを巡らせているうちに、負けてしまった一番の原因は、私の大会に対する考えの甘さにあったことに気づいた。大会に出られることだけで満足して、勝とうという意志が弱

かった。そう気づいたとき、張り詰めていた思いが、一気に和らいだ。自分に対する悔しさと情けなさが消え、強くなりたいという思いが生まれた。失われていた情熱が、私の中でふつふつと燃え始めた。「次の大会では、絶対に勝とう。」そう強く決意した。

その思いを原動力に、私は次の大会に向けた練習を始めた。部活の練習以外にも、毎日家で腕立て伏せやスクワットをした。また、部活のない日には、一人で何百回も素振りをした。がむしゃらにトレーニングを続けていくうちに、部内での試合で勝つことが増えた。

「スマッシュ、速くなったね。」友人のこの言葉が、胸に響いた。

大会本番、私は前回とは違い、自分に自信を持つて戦うことができた。日々の積み重ねや「勝ちたい」という強い思いが、あつたからだと思う。私は、目標としていた「一回戦突破」を果たし、その後も勝ち進んで県大会代表に選ばれた。県大会出場が決まった瞬間、体中から喜びが込み上げてきた。苦しい思いばかりしてきたが、それも含めて、またバドミントンを心から好きになれた気がした。

一度負けたら、大会が終わる。そのような厳しいバドミントンの世界で、私が勝ち進めたのは、一つ一つの練習を着実にこなしていき、目標に向かって努力し続けたからだと思う。県大会では、思い通りの結果が残せなかったが、高校の大会でそれ以上の成果を出したいという新たな目標ができた。

もう中学生の大会は終わったが、私は今でも部活を続け、先輩たちに教える側となって練習に取り組んでいる。今度は私が、先輩の手下となれるように、技術を磨いていきたい。

「強くなりたい」という思いを胸に。